

新共同訳聖書では

「コヘレトの言葉」となっていますが、口語訳「伝道の書」、新改訳「伝道者の書」でした。つまり「コヘレト」(1:1, 2, 12等)をどのように解釈するかによって書名が代わったといっている良いかと思えます。通常「コヘレト」とは、「集まっている者」、あるいは「伝道者、説教者」という意味の言葉ですが、これを固有名詞として読むのかの違いです。

著者は、伝統的にダビデの子ソロモンであるとされ(1:1, 12)、ソロモンは青年期に「雅歌」、壮年期に知恵の言葉としての「箴言」、そして晩年にこの「コヘレトの言葉」を記したとされてきました。しかし文体の特徴等から、バビロン捕囚から解放された頃、つまり第二神殿が完成した頃に記されたとされる説もあります。つまりソロモンの名を借りて権威付けつつも、捕囚後の名のない人が語った言葉であるとの解釈です。いずれの説も考えられますが、私としてはどちらか一方に決定しなければならないとは、思っていません。コヘレトの言葉を読むにあたり、時代を超えた一人の人間の人生そのものに対する問いかけが記されているのであり、あえて著者や時代を特定する必要はないかと考えています。

2 コヘレトは言う。

(口語訳)

なんという空しさ

伝道者は言う、

なんという空しさ、すべては空しい。

空の空、空の空、いっさいは空である

つまり、新共同訳のみ「空しい」と訳したのですが、他の主な日本語訳は「空」と訳しています。これは何を意味しているのでしょうか？

「空しい」との訳は、カトリック教会で訳されたバロバル訳(1980)という聖書がありますが、このバロバル訳が最初かと思えます。この「空しい」は形容詞であり、「空しさ」もそれに派生した名詞です。ここには人間的な感情が表される言葉になっているように思えます。もちろん、コヘレトの手紙で扱うことは、人間が生きるとは何かということに対する問いかけであり、誤りではありません。しかし「空しい」という形容詞を用いることにより、「空しい、空しい」と同じ言葉が繰り返されている言葉を「なんという空しさ」と訳し、言葉が軽いといえますか、心の奥底に語りかける言葉となっていません。

しかし「空」と語ることで、一人の人の人生だけではなく、空間的な存在そのものに対する広がりが出てきます。そのため、聖書協会共同訳(2018)において、またカトリック教会もフランシスコ会訳聖書(2011)において、元の訳に戻しています。

では、「空の空 空の空、一切は空である」と語られたとき、私たちはどうすれば良いのでしょうか。書簡の作者は、私たちにただ同意を求めているものではありません。聖書に記された神の御言葉として私たちは聞かなければなりません。つまり書簡の著者の結論をまず確認することにより、私たちは、私たちに語りかけられている神の御言葉として、初めて聞くことができるようになります。その結論が記されているのが書簡の最後12:9~14です。「賢者の言葉はすべて、突き棒や釘」(11)は私たちの心に突き刺す辛辣な言葉です。人間的な知恵・言葉がどれだけ素晴らしく、それらの功績が世に残ったとしても、自身が肉の死を迎えたとき、「空」となります。ソロモンは知恵が与えられ、栄華を極めました。それにも関わらず、それらが「空」であると語り、自らの功績のすべてを否定します。空の空と語り始めた著者が、自分自身の存在価値を見だし、有意義な人生とするために、ひとりの牧者に委ねること、つまり主を信じ、主の御言葉によって生きることであると語りかけます。この結論を理解した上で書簡を読み始めることにより、ただの人生訓ではなく、永遠から永遠に生きて働く主の御前に生きることの喜び、存在価値が初めて生じます。

そのためウェストミンスター大教理問答問1は、「人間の第一の、最高の目的は、神に栄光を帰し、永遠に神をかぎりなく喜びとすることです」と答えます。つまり私たちが生きる時、主が共におられ、御子の御業による罪の赦しと神の国における生命が約束されています。このことを知ることで、私たちは生きる価値がある人間であることが示され、喜びが溢れてきます。生きて働く主との出会いがなければ、コヘレトが語るごとく「空の空、いっさいは空である」となります。主が私たちに示され、主による救いの喜びに生きることが許されていることに感謝と喜びをもって、日々歩み続けて行きたいと思えます。

私たち人間は、地上に誕生してから、肉の死を迎えるまで、長くても、90年・100年、最大120年程度です。そして歴史に名前が残る人はその中でもわずかです。ほとんどの人が、死後、家族・知人が亡くなることにより忘れ去られていきます。このことを「人は二度死ぬ」と語ります。つまり殆どの人は、地上から忘れ去られていきます。

そのため、自分が生きていることに意義を感じない・空しくなる人が少なからずいます。このとき神を知らない人たちの生き方を2つ考えることができます。一つは、努力をして、自分の名前を世に遺すために、権威・権力・財を身に付けようとすることです。

そしてもう一つの生き方は、自分が生きている価値を見いだせない人たちです。まさにコヘレトの言葉が語り、多くの人たちが究極的な問題としてもっていることです。そして多くの人たちは、自分は世に生きることに於いて名を残すような者ではないが、生きることの空しさを考えたくはないために、今を楽しむことに一生懸命になります。今日の御言葉においては、生きることの価値を見いだせない人たちのことが語られていきます。

このとき著者は、毎日の労働の苦しみと、それにも関わらず毎日同じことが繰り返されるだけで生活が変化しないことに空しさを覚えています。農作業や牧畜に携わっていれば、毎日の天気に対応することに追われ、天候に右往左往させられ、身体共に疲れ果てることもあります。このとき自分は何のために生きているのかという疑問が生じてきます。つまり「空しさ」は「空」と訳した方が良くと前回語りましたが、心の貧しさと共に、肉体的な苦しみを伴い、諦めと言った思いが生じてきます。

一方、自然は人間の労苦など知らないかのごとく、毎日変わりなく、脈々と同じことを繰り返していきます(5-7)。そして時として、日照りが続き、飢饉をもたらします。暴風雨により洪水が起こることもあります。それが世代を超えて繰り返されて行きます(4)。

こうした自然の下に生きるとき、時として「自分が生きている価値があるのか」と思い、生きる希望を失います。これが著者の嘆き、「空の空」なのではないでしょうか。

しかし前回もお語りしましたが、コヘレトの言葉の著者は、主なる神がおられることが示されています(12:13-14)。主の存在を受け入れるとき、日々繰り返される自然の出来事が違って見えてきます。つまり著者は「太陽の下」(3)と語り始めますが、主を知るとき、この太陽を創造し今も支配しておられる神がおられることを受け入れることができます。

このとき発想が逆転します。苦しみが与えられているのではなく、滅び行く私たちに神の恵みが与えられているということです。つまり罪の故に滅び行く人間であった私たちに、救い・神の子とされる神の愛が示されています。このことを知るとき、毎日の生活において、生きるために水が与えられ、時期がくれば農作物の実りが与えられ、必要が満たされていることを知ることができ、感謝と喜びをもって生きることができるようになります。

つまり私たちが主なる神の存在に気が付くとき、同時に主により滅びから免れ、御子の御業の故に罪が赦され、神の子とされていること、神の御国における永遠の生命が与えられていることを知り、希望をもって生きることができるようになります。同じことであっても、自分中心に考えるのではなく、神の側から見て考えるとき、生きる希望が生まれてきます。主の救いの約束(恵みの契約)は破られることなく、永遠の希望が約束されています。

なお「ではなぜ、人は、苦しみ続けるのか」といった疑問が残ります。人が罪を犯した結果・罪人であるからです。罪人であること・弱さを知ることが求められています。自己中心に生きていては、神の救いを信じることはできません(参照：ウエストミンスター信仰告白5:5)。

また「なぜ人は歴史の中で消えていくのか？」と言った疑問が残ります。この世において名のない・はかない存在であっても主なる神にとっては尊い存在・価値のある人間です。金持ちとラザロの話を確認したいと思います(ルカ福音書16:19~31)。ここでは金持ちには名前はなく、できものだらけの貧しい人にラザロと名が記されています。地上において名を残してもやがては忘れられていきますが、天国では忘れられることなく、永遠に残り続けます。主なる神を誉め称えつつ、永遠に喜びの内に生き続けることができます。

このとき、地上における歩みもまた空しいものではなく、苦しみの中にあつたとしても、なおも主の恵み・希望に包まれて喜びに生きることができるのではないのでしょうか。

コヘレトの言葉を読み始めています。著者はソロモンといわれ(1:1,12)、人間としての存在意義、生きる価値を考えつつ、空である、空の空であると嘆いています。

ここで私たちの生活に目を移そうと思いますが、もうすぐ4月を迎え、新しい年度が始まりますと、新しい学校に入る子どもたちがいます。小学校・中学校・高校、そして大学、大学院と、学びを続けて行くこととなります。学ぶことは知恵・知識を身に付けることであり、学校はその基礎を学ぶ所です。そして知恵・知識を身に付けることにより、社会において成功することを願います。地位・権威を得て、よりよい生活をするために、学力・学歴が重要であると思われています。

確かにその通りですが、同時に、人が知恵・知識を極めようとするとき、人は、自らの無知が示されていきます。このことは学問の広がりを見ても、理解できることではないでしょうか。つまり大学教育は、中世に、神を知る神学として始まりました。その中に社会科学も自然科学も含まれており、神が創られたすべてのものを聖書の枠組みで、理解・研究が始まりました。しかし、宗教改革・産業革命を経て、学問は神学を離れ、分野毎に分かれていきます。そして、近世から20世紀・21世紀と進むにつれて、研究の分野は、細分化されていきます。ですから、研究者の間でも、隣の研究者が何を研究しているのか理解できないようになってきています。このとき人は「自分は何でも知っている知恵者である」とは決して語ることができず、むしろ「自分は知らないことばかりであり、自分の知識はちっぽけなものである」としか、語ることができなくなります。

ソロモンについて、「神はソロモンに非常に豊かな知恵と洞察力と海辺の砂浜のような広い心をお授けになった」(列王上5:9)と語られています。そしてシェバの女王もソロモンの知恵について証言しています(列王上10:6~9)。

このように知恵が与えられていたソロモンでさえも、「天の下に起こることをすべて知ろうと熱心に探究し、知恵を尽くして調べた。神はつらいことを人の子らの務めとなさったものだ。わたしは太陽の下に起こることをすべて見極めたが、見よ、どれもみな空しく、風を追うようなことであった」と告白します(13-14)。「熱心に探究し、知恵を尽くして調べた」とは熱心さは分かるのですが、どうも言葉が軽いように思われます。口語訳では「わたしは心をつくし、知恵を用いて、天が下に行われるすべてのことを尋ね、また調べた。これは神が、人の子らに与えて、ほねおらせられる苦しい仕事である」と訳します。また、新改訳2017では「私は、天の下で行われる一切のことについて、知恵を用いて尋ね、探り出そうと心に決めた。これは、神が人の子らに、従事するようにと与えられた辛い仕事だ」と訳します。知識を得ることは、苦しい仕事・辛い仕事です。

そのためコヘレトはさらに、「熱心に求めて知ったことは、結局、知恵も知識も狂気であり愚かであるにすぎないということだ。これも風を追うようなことだと悟った。知恵が深まれば悩みも深まり、知識が増せば痛みも増す。」(17-18)と告白します。

ここにあるのは、先程紹介した現代の研究者の思いと重なる部分です。他の人に理解できない知識・知恵を深めれば深める程、自らの小ささ・無知を知らしめられるのです。ものごとを突き詰めれば突き詰める程、その先にある無知を知ることになるからです。

ここまできて始めて、これらのものをお創りになられた主なる神に目を向けることができます。つまり周囲の人々との比較・他者との優劣を争うのではなく、すべてを創られ、すべてを支配しておられる主の御前に小さな存在、無に等しい存在であることが示されます。そして、他者との関係にあっては、主の御前に何も誇ることはできない自分がいるため、遜り、謙遜になるしかなくなります。そして私たちが主なる神を見上げたとき、人となられたキリストの歩みを顧みることが求められます(参照：ウェストミンスター信仰告白8:3)。

神の御子であるイエス・キリストは、父なる神のもっておられる知恵と知識を兼ね備えておられます。それは義・聖・真実でもあり、私たちは、御子のもっておられる知恵と知識、義・聖・真実を求めて、キリストに倣った生活を行うことが求められています。

そのためコヘレトは、最後の言葉、結論でこのように語ります(12:13)。

「神を畏れ、その戒めを守れ。」これこそ、人間のすべて。

コヘレトの言葉では、著者が語る「空」に注目します。1章では、自分の存在・自然の中にあって埋もれる存在であること、そして前回は、知恵・知識を持っていても、なおも「空」であることを語ってきました。

そして2章においてまず語るのが「快樂」と「笑い」です。似たような言葉ですが、「快樂」は肉体的な喜び、祭りや趣味に興じることと言って良いかと思います。そして「笑い」とは、悲しみ・苦しみから逃れるために楽しむことです。しかし著者は、それらも「空」であり、「狂気だ」とも語ります。快樂を求めるにしても、笑いを求めるにしても、「その時」のことであり、永遠に続くもの、人生そのものに訴えるものではないからです。

そしてコヘレトの言葉の著者は、様々なことに挑戦し、極めます(3-11)。酒を飲み(3)、事業を行います(4)。庭園や果樹園(5)・池などもつくり(6)生活における優雅さを求めます。奴隷や家畜を所有し(7)、財産を蓄え、側女をもち社会的なステータスを得ます(8)。つまり知恵を得ることにより、社会的に成功者と見なされ、人々から称賛を得ます。そしてエルサレムに住む者の中で、誰よりも栄え、手に入らないものがなかったと語ります(9-10)。誰もがうらやみ、憧れる生活です。ソロモン王はそうした生活を得ていました。

しかしソロモンはそれらを、「見よ、どれも空しく、風を追うようなことであった。太陽の下に、益となるものは何もない」(11)とこたえます。そして手紙の著者は日々の生活の中であって手に入れることのできない、永遠の安らぎを求めて、著者はあえいでいます。

そして著者は、自らが知恵を得て、快樂・笑い、手に入るすべてのものを手に入れることができるようになったことに対して、そのような生活をしていない人たち、ここでは「狂気(無知)と愚かさ」の違いを顧みます(12~13)。誰が見ても、知恵を持ち、地位を築き、財産を持つ賢者の生活の方が、何も持たない人よりも「良い」と考えます。著者自身も、そのことを言い聞かせようとしています。

しかし著者は賢者も愚者も結局は同じであり、「空しい」と結論つけます(14-17)。栄華を極めた時、歴史に名を残すことがあるかもしれませんが(18、1章)。しかし「太陽の下では誰も知らない。空しい」のです(19)。自分が生きている、自分が成功した、自分の素晴らしさを誇らしい、と思うとき、客観的に自分の姿を顧みると、何も残りません。知者も愚者も同じように消えゆく存在に過ぎません。この空しさを、著者は語り続けます(22-23)。

すべてを手に入れることができた著者は、人間社会・世界・自然という相対的な社会において「空」を感じましたが、そこに主なる神がおられ、働いておられることが示されます(24)。主がおられることが示されるとき、主による救い、神の国を見据えることができるようにされます。すると、知識も地位や財産も、快樂や笑いも、すべて主が備えてくださった恵みであることが示されます。このときこれらのものが「空」ではなくなり、私たちにとって価値あるものであることが示されていきます。

私たちが生きるこの世においては、地位や財産を持ち、いわゆる良い生活をしているひとが知識・知恵を持っている者と言われます。しかし「善人」・「悪人」(26)は違います(参照：ウェストミンスター信仰告白33:2の「義人」・「悪人」も同じ使われ方をしています)。主を知り信じている者は、知恵も知識も、地位も財産も、すべて主の恵みとして与えられており、それらを用いて主が私たちの生活の養いが行われていることを知ることができます。このとき私たちの地上での人生は、空しいものではなく、神の御国において与えられる永遠の祝福に繋がる主の恵みであるを知ることができるようになります。

神を知らない人たちは、この世の地位や財産にしがみつきますが、神による救いに生きるキリスト者は、主がお与えくださる神の御国にこそ、私たちの生きる目的があり、主の祝福が満たされていることを知っているからこそ、今、財産や地位を失ったとしても、さらには自分の命をも失ったとしても、神の御国における祝福が示されており、喜びに生きることができるようにされていきます。そのため主イエスは、「わたしについて来たい者は、自分を捨て、日々、自分の十字架を背負って、わたしに従いなさい。自分の命を救いたいと思う者は、それを失うが、わたしのために命を失う者は、それを救うのである」とお語りになります(ルカ9:23-24)。

「空の空」と語り始め、人生の空しさばかり語っているようですが、コヘレトはすべては主なる神の御手によって与えられたことが示され(2:24)、神の御支配に生きることの喜びを知ります。

そして3章に入りコヘレトは「天の下の出来事にはすべて定められた時がある」(1)と語り、主の御支配に私たちが生きるとき、私たちの人生がどういうものであるかが分かってくるのだと語り始めます。

ここで、生まれる時・死ぬ時を含め、人生における様々な出来事・経験が語られていきます(3-9)。ここで語られているのは、私たちの人生のごく一部です。私はここを読んでいて、人生の様々な出来事・経験が、写真が並べられているように感じました。このときコヘレトは、「人が労苦してみたところで何になる」と語り(9)、人生の何一つ、変更することはできないと語ります。神のいない世界に生きてみると、これらの出来事は過ぎ去り、消えていきます。このとき生きる理由を見失います。これがコヘレトの語る「空」です。

しかし、コヘレトは主なる神を知りました。そして「神はすべてを時宜にかなうように造り、また、永遠を思う心を人に与えられる」(10)と語ります。人にとっては、一つひとつの出来事は、社会・歴史・世界から客観的に見ると、消えていく存在であることをコヘレトは嘆いていました。しかし、主なる神は、永遠から永遠にすべてを定めておられ、すべてをご存じであり、一つひとつの出来事、つまり一枚・一枚の写真のすべてが、主なる神はお覚えくださり、恵みと喜びに満たされています。

そのため、私たちに与えられる一つひとつの出来事、私たちが快樂を求めて生きることも、すべてが神がお与えくださった賜物であると語ります(13)。つまり、コヘレトの経験した一つひとつの出来事・経験は、一つひとつ、そのすべてが主なる神から与えられた恵みであり、神の御計画に約束されていたことです。

つまり主なる神は、そのすべての出来事において、理由をもって定めておられます。そして一つひとつの出来事に価値を定めておられます(14)。

そして主なる神を知る時、私たちは同時に主によってもたらされる最後の審判が示されます。最後の審判においては、主なる神による裁きが行われ、すべての者が、主の裁きの座に立たされることをコヘレトは知ります(16-17)。

しかし、神を知らない人生、人は滅びに向かうこととなります。つまり、動物たちと同じように死に、そして塵に帰って行きます。

つまりすべての者は、主の御前に罪人であり、主の裁きもたらされます。そして誰一人、そこから抜け出すことができません。「全的墮落」であります。そのため神を知らず、神による裁きも神による救いも知らずに生きるとき、人は滅びに向かって歩むこととなります。それがコヘレトが語る「空の空」につながります。

最後にコヘレトは「死後どうなるのかを、誰が見せてくれよう」(22)と語ります。これは、神を知らなかったときに、自分のために楽しんで生きようとしたこととは異なります。死後どうなるのか、知らずに生きることではありません。主なる神を知り、神による救い、裁きからの解放が示された者として、主なる神の存在を知り、主を信じて生きるとき、主の裁き・滅びではなく、天に昇り、救われ、永遠の生命が約束されていることを実感しています。

最初に、様々な出来事・経験が写真のように示されていたと語りましたが、それら一つひとつの出来事は、罪の故に滅び行く姿が示され、なおも主の恵みにより、滅びではなく、主による救い・天国が示されるために、一つひとつの出来事が必要だったのです。そのため、神を知らずに生きるとき、消えていくものとして空しく映っていた出来事ですが、それらは、神を知り、神の恵みに生きることが示されるために、必要な出来事であったことが示されました。このことが主の摂理に生きるということではないでしょうか(参照：ウェストミンスター信仰告白5:4)。

そしてコヘレトの言葉を記している今、著者は、神の国・天国における祝福という写真をはっきりと見据え、主と共に生きる喜びに満たされているのではないのでしょうか。

コヘレトの言葉は4章から箴言のような短い教訓の言葉が語られていきます。この4章も、異なった話題が並んでいるように思います。しかし、これらのことの共通点を探り、「社会のしがらみ」をテーマに、読み進めることにします。

虐げ・虐待・迫害は、権力を持つ者が、持たない者に対して圧力をかけ・苦しめることです。このとき権力を握る者が一番恐れることは、弱者達が協力し反抗されることです。そのためより弱い立場の人間をつくり、自分たちの苦しみのほけ口を、より弱い者たちに向けさせます。そのため虐げられている者たちは、より弱い立場に落とされることを恐れ、支配者におもねます。それは結果、各々は不満を持ちつつ、一人一人は孤独の道を歩むこととなります。

そうした中、生きていくことのつらさ、空しさ故に「死んだ方がましだ」、「生まれてこなかった方が幸福だ」と言う言葉が出て来ます(2,3)。これらは「太陽の下」(1,3)、つまり神との交わりがないこの世における人生から生じている言葉です。この虐げの根本的な問題は、罪から来る人間の支配欲です。ここに問題の核心があります。

続けてコヘレトが語ること(4-8)は、労苦して競争心を持つこと、孤独の苦しみについてです。人々は競争社会に勝ち抜かなければ生きていけないと思っています。しかし競争を行い労苦しても、勝利した結果を誰も喜んでくれなければ、コヘレトの語るとおり空しい人生となります。

スポーツは、競技者の努力が勝敗を左右します。そして多くの者が勝敗に一喜一憂し、生きる力が与えられます。しかし為政者は、そのスポーツを利用します。スポーツに一喜一憂することで、彼らが置かれている痛み・虐げという現実から目を逸らせることができるからです。

ウェストミンスター信仰規準が作成された当時の国王は、ピューリタンたちが聖書を通して王の政治に対して抗議することに対抗して「スポーツの書」を発布しました。聖書を共に学ぶことにより王に対して批判的にならないように、日曜日の午後にスポーツを奨励したのです。

ヒットラーはオリンピックを国民高揚の場として用いました。オリンピックやワー

ルドカップ等、私たちが楽しむのは良いですが、為政者にとっては都合のよい道具であることを、私たちは忘れてはなりません。

9節からは一変して、交わりの大切さを語り始めます。ひとりよりはふたり、二人よりは三人の方が良い。12節で語られていることは、毛利元就が語った三矢(さんし)の訓(おし)えと同じことを語っています。

しかしこのことは人間の生きる知恵に留めてはなりません。人間の本質、つまり三位一体である主なる神が人を「我々にかたどり、我々に似せて、人を造」られた(創世記1:22)ことから考えなければなりません。主なる神が位格間の豊かな愛の交わりを持っておられるように、人間が相互間においても交わりを持つものとして、人は造られました。そして男から女が造られたときも、主は男に合う助ける者として女をお与えくださいました。ですから、人が孤独に生きること、孤独にさせられることは、創造の秩序に反することなのです。

次の段落(13-16)は理解しがたいです。人の一生は年々知恵が与えられていくものであり、そのため年長者が敬われるべきです。しかし、年若くして知恵が与えられる人がおり、一方年長者であっても知恵を蓄えることなく愚かな者もいます。そのため主は、しがらみにとらわれることなく、知恵ある少年がリーダーとなることを求めています(15)。しかし世の中はそうしたことを受け入れることをせず、杓子定規を求めます。

17節は口語訳・新改訳では5:1となっています。しかし4章の枠組みで読むと、4章全体が理解できるようになります。

つまり17節は、悪いことをしても自覚がないような愚か者は、神礼拝を行っても形だけであり、やらない方がマシであると語っています。つまり、社会常識ばかりにとらわれていると、真の正しいことが見えなくなり、過ちを犯すこととなります(13-16)。

そして、4章の前半において語られていたことにおいても、世の常識・秩序・しがらみの中、絶望を受け入れ、「空」を覚えるのではなく、主なる神を信じ、主の創造の秩序に生きて、隣人との交わりを行うことにより、空しい人生ではなく、神の救いの秩序に組み入れられた喜びの人生が与えられることを知ることができます。

生きることは「空しい・空の空」であると語り始めたコヘレトですが、神がお与えくださる人生であることが示され(2:24-26)、3章では神の主権の確かさの中で生きるか否かが問われ、4章では「孤独」や「しがらみ」の中、何を目指して生きるべきかということで、「主なる神」に注目しなければならぬことを確認してきました。

そして5章も格言集ですが、5章全体でコヘレトが私たちに何を語りかけたいのか考えて読み進みたいと思います。つまりコヘレトは、「人生の礎、何を目標・目的にして生きるべきか」を問い直します。

「焦って口を開き、心せいで

神の前に言葉を出そうとするな」(1a)。

神の御前に生きる時、私たちは神との関係性が問われます。「焦る」、「心せいで」とは、苦しみ・艱難に置かれているときに出てくる言葉です。そしてこうした言葉が出てくるとき、神の御前にひれ伏して生きる状況にありません。自分の苦しみを神によって助けて欲しいという、自己中心・自分の思いを何でも聞き届けてくださる神、いわゆる神を自分の召使いとした状況で、言葉を発しています。

そのためコヘレトは、

「神は天にいまし、あなたは地上にいる。

言葉数を少なくせよ」(1b)。

と語ります。つまり人前で自分の思いを語り続けるのではなく、主の御言葉に聴き、主にお祈りすることが求められています。

「願をかける」(3)と語られますが、神への約束です。自分が主人になり、神を召使いにしてはなりません。主は、天地万物を創造し、私たち人間に生命をお与えくださいます。だからこそ主に願うとき、私たちは精一杯果たすことが求められます。

私たちは罪人であり、私たちが言葉で過ちを犯さないことはあり得ません(参照:ヤコブ3:2,8)。そのことを私たちは自覚し、神の御前に遜ることが求められています。

続けてコヘレトは人間の間上下関係に関して語ります(7-8)。絶対的なお方である主なる神がいなければ、人は他者との関係において、上か下かを常に気にして生きます。そして下の者であれば虐げが行われ、上の者だとみればこびへつらいが生じます。そして常に、「どうすれば人の上に立つこと

ができるのか」を考えることとなります。

続けてコヘレトは財産について語ります(9-11)。神の御前に生きる時、生命を与え、すべての恵みをお与えくださる主に委ね、与えられたものを主に感謝して生きることとなります。しかし、主を信じない者・神を自らの召使いのように思う者は、常に財産を追い求め空しい生活を送ります。

続けて富の管理について語ります(12-16)。財産を失うことが「自業自得」と因果応報のように語ってはなりません。キリスト者であっても、災いは訪れ、失敗もします。それでもすべては主によって与えられた恵みであり、試練です。そのためすべてを失った時でも、なおも主に必要を祈り求め、信仰の歩みを続けることができるのです。

そしてコヘレトは「見よ、わたしの見たことはこうだ」(17a)と語ります。「神に与えられた短い人生の日々に」。つまり神を生きる基本・礎とすることです。主が私たち人間に生命を与え、日々の食べ物、すべての暮らしに必要なものを備えてくださいます(17b-18)。主なる神と人間との関係、それはそもそも創造主なる神と被造物である人間との関係に始まっています。だからこそそのようなときにも、私たち人間が主役・主人になり、主なる神を召使いにしてはなりません。

主イエスは、「求めなさい。そうすれば、与えられる。探しなさい。そうすれば、見つかる。門をたたきなさい。そうすれば、開かれる」(マタイ7:7)と語り、何でも祈り求めてよいことをお語りくださいました。しかしこれは、あなたが中心になり、主人になって、神を召使いのようにしてこき使うことではありません。願いを祈り求めつつも、なおもそこにある主の御旨に聴くことが求められています。

だからこそ、コヘレトは最後に「彼はその人生の日々をあまり思い返すこともない。神がその心に喜びを与えられるのだから」(19)と語ります。主は、私たちが罪の刑罰としての死・滅びから解放して下さり、神の御国を約束して下さいました。だからこそ、私たちは、地上において苦しむときも、どのようなときにも、御国へ招くために必要を整えてくださいます(参照:ウエストミンスター大教理問1)。

「空の空」と語り始めたコヘレトは、主なる神と出会うことにより、空しさはなくなり、神の恵みに生きていることを語ります。そのため2章以降も、主の恵みに生かされていることを前提に、如何に神のいない人生が空しいかを告白しています。

6章でも神のいない人生の空しさを語ります。ヨハネ黙示録を読むときらせん階段を昇るように、同じようなことが繰り返されていることに気が付くかと思いますが、コヘレトの手紙を読んでいると、同様に、主の恵みを語りながらも、神を知らない人生に生きることの空しさが、繰り返し語られていきます。そして6章では、最初と最後で、神のいない「太陽の下」に生きる人間の空しさが語られています。

6章では、神の恵みが示されながらも、それを忘れ、それを知らないかのように生きる人間の姿が語られます。ポイントは、2節です。「ある人に神は富、財宝、名誉を与え、この人の望むところは何ひとつ欠けていなかった。しかし神は、彼がそれを自ら享受することを許されなかった」。

主なる神は、その人の必要を満たしてくださり、「富・財宝・名誉」を与えます。このとき神が何を目的にその人に「富・財宝・名誉」をお与えになられたのかを考えなければなりません。

人は自ら享受する、つまり神から与えられたものを自分で獲得したものとして自分のために用いました。しかし主は賜物として人に与えられたものを、人が自分たちのため自由に用いることを許されません。

主なる神が天地万物を創造された目的は、創世記1:26で語られています。「我々にかたどり、我々に似せて、人を造ろう。そして海の魚、空の鳥、家畜、地の獣、地を這うものすべてを支配させよう。」

「我々」つまり御父・御子・御霊なる三位一体の神にかたどり、神に似せて、人が造られました。これは、主なる神が三位の間で恵み豊か・愛の交わりに生きているものを、私たち人間も、神との間で、また人間相互の間で、愛の交わりをもって生きる者とされたということです。

つまり与えられた富・財宝・名誉を、持たない者のために用いること、相互の益のために用いることです。このとき高齢の方

々、体や精神に障害を持っておられる方々、子どもたち等の弱者に対する配慮が求められます。このことが神の民である私たちキリスト者に求められています。金持ちの青年に足りないものとして、主イエスが指摘されたのは、まさに貧しい者に対する愛がないことでした(マタイ19章)。

つまり、主がお与えくださった「富・財宝・名誉」を自ら享受するとは、他者と交わることがなく、持たない者に対して施しをすることのない、自己中心の生き方です。

そしてコヘレトは、自己中心に生きること、主によって与えられた恵みを忘れて自らのものとして生きようとするのは、空しく、大いに不幸なことだと語ります(2)。

コヘレトは、こうした空しい者の代表として、「百人の子を持ち、長寿を全うした者」(3)、「千年の長寿を二度繰り返した者」(6)について語ります。ここで前者は「闇の中に去り」(4)、後者は「すべてのものは同じひとつの所に行く」(6)と語り、空しい、何にもならないと語ります。

つまり神のない生き方は、すべてのことが空しいと、コヘレトは改めて語ります。

そして、労苦・賢者・欲望も空しいと語ります(7-11)。特に「言葉が多ければ空しさも増すものだ」(11)と語り、知恵において他者に対する優位性を持ったとしても、人として生きる希望を得ることはなく、空しいと語ります。言葉数を増やすのは、自らの行いに対して自信がないため、言い訳を語っているのです。なぜならば、神のいない世界に生きる者は、だれも幸福を知らないからです(12)。人が死後どうなるのか、太陽の下では、誰も教えてくれません。

太陽をも創造された主なる神を見上げるとき、空しさを覆い隠す天国という幸福が示されます。そして主を信じるとき、肉の死で終わりではなく、キリストが十字架の死から甦ってくださったように、復活の体が与えられ、天国における永遠の祝福の生命があることが示されます。

そのため私たちは、太陽を超えた方、主なる神に聴くことが求められています(ウェストミンスター小教理問10)。主なる神がお創りくださった創造の秩序、主がお与えくださった賜物の恵みに生きるとき、私たちは空しさではなく、生きる喜びが与えられます。



コヘレトの手紙7章は、4・5章同様に格言が語られていきます。そして、この7章を読み進むにあたり、一つひとつの格言を確認するのではなく、7章でコヘレトが語りかける言葉を見いだそうと思います。

最初は、「〇〇は△△にまさる」という表現が繰り返されます(1-6)。ここでは最後に「これまた空しい」と語られていることに注目すべきです。つまりコヘレトは今まで神のない世界に生きることの空しさを語ってきましたが、神のない世界で優劣を競っても、意味がないことです。

人々にまさって生きている人々も、罪の誘惑があり、賢者も理性を失い、また愚者となることがあります(7-10)。つまり「まさる」のは、絶対的な主なる神が存在しないため、相対的な関係で生きているのです。

コヘレトは続けて知恵を求めるように語ります(11-12)。これは賢者の持つ知識とは区別された神を知ることです。そのため「知恵はその持ち主に命を与える」(12)と語ります。神を知ることにより、空しい生活から離れ、神の命に生きることができま

す。つまり相対的な関係に生きるのではなく絶対的な主なる神の御前に生きることであり、その結果すべてのことが神の聖・義・真実に照らして生きることとなります。

続けて、神の支配・神の摂理に生きることを語ります(13-14)。主なる神が私たちに生命を与え、日々の生活をお与えくださいます。その中で私たちは、苦しい・悲しい・空しい・喜ばしい・嬉しいといった感情をもって生きます。そして主がお与えくださった順境は、感謝して受け入れ、喜び樂しみを

持って生きることができま

す。そして逆境、つまり苦しみ・悲しみは、主がお与えくださった試練です。パウロは「苦難は忍耐を、忍耐は練達を、練達は希望を生むということを」(ローマ5:3-4)と語り、また「神は真実な方です。あなたがたを耐えられないような試練に遭わせることはな

ならず、試練と共に、それに耐えられるよう、逃れる道をも備えてくださいます」(1コリント10:13)と語ります。主は私たちに試練・苦難を与えますが、このとき私たちは信仰の訓練を受け、神の民に相応しいものとされるのであり、主は常に私たちをお

覚えくださり、守ってくださっています。

そして「この空しい人生の日々に わたしはすべてを見極めた」(15)と語り、神を知らずに生きてきたときに空しいと思ってきたことのすべてが、神を知ることにより、意味あることであったことを見極めます。そして「神を恐れ敬えば どちらをも成し遂げることができる」(18)につながります。

主の摂理に生き、主がお与えくださる日々の生活をすべて受け入れることにより、空しさはなくなり、忍耐と鍛錬、感謝と喜びの生活へと変えられます。

そして「知恵は賢者を力づけて 町にいる十人の権力者よりも強くする」(19)と語り、神を知ること、神を信じることにより、相対的に良いものとして語られてきた賢者よりや権力者たちよりも、生きる力が与えられていきます。

知識を持ち、神を信じた者も、罪赦された罪人であり、罪を犯します。ましては神を知らず、空しさの中に生きる者は、真理を知りません。そのため、どれだけ知識を持っていても、その人の言葉は、神の御言葉に照らされて生きる者にとって力はなく、空しいものです。だからこそ、彼らの言うことを、いちいち気にする必要はなく、聞き流してよいのです(20-22)。

そして最後に結論的なことが語られます(23-29)。コヘレトは知恵、つまり神を知り、神の知識・神の御言葉に聴きました(23, 25)。神の知恵は、神を知らない者には到達できないことです(24)。そして空しい人生を歩む者、悪の中・罪の中、滅び行く者の姿が語られていきます(25-28)。

ここで女性蔑視な表現が用いられています。これは蛇の誘惑により女より罪が混入したことを意識して語っています(創世記3章)。ですから新約の時代に、女性蔑視が認められるわけではありません。

そして人に罪が混入し、神との交わりを途絶え、神の御言葉に逆らって生きるものとなったことが、最後の言葉に表れています(29、参照：創世記1-3章)。

だからこそ、人は知恵に生きる、つまり神を知り、神の御言葉に聞き従って生きる時、生きる目標・目的が示され、空しさはなくなります。

コヘレトは知恵を求めるように語りました(7:11-12)。これは賢者の持つものとは区別され、「神を知ること」です。そして「知恵はその持ち主に命を与え」(12)ます。神を知ることにより、空しい生活から離れ、神の命に生きることが出来ます。

そして「人の知恵は顔に光を添え、固い顔も和らげ」(8:1)ます。神を信じ、御言葉により、私たちが神の民として、どのように生きるべきかが示されます。

しかし神の御言葉は、賢者が知識を身に付けるように、御言葉を学び理解すれば身につくものではありません。御言葉を正しく解釈すること、つまり主が語ろうとしている本質を理解することが求められます。

そしてコヘレトは、「この言葉の解釈ができるのはわたしだ」と告白します。コヘレトは、主からの預言者、主から御言葉・御言葉の解釈が与えられた者でした。

つまり主の知恵を得るために、自分で理解しようとするのではなく、主の霊・聖霊の働きに委ねて御言葉に聴くことです。

そして主は従順に王に従うことを求められます(2-5)。私たちは、強権的な王に従うことができるのかと思います。しかし王・為政者に従うことは、主の創造の秩序に基づくことです(参照：ウェストミンスター信仰告白23:1)。つまり、主を知り、主なる神を信じた者として、主が立てられた王に従うことが求められます。王、為政者は、それぞれの国で立てられますが、その背後に主の支配があり、主の許しがなければ誰も王に立つことはできません。そのために主が立てられた王に従うことが求められています。

もちろん王も、一人の人間・一人の罪人です。そのために王から、不快なこと、納得のいかないことを求められます。しかしこうした中に、私たちはキリスト者として生きることが求められています。

そして罪の世界、死・戦争・悪を避けることができません。コヘレトはこれらが神の霊の支配にあると語ります(8)。神の摂理は罪の世界にも及びます。主が罪を肯定されることはありませんが、罪の世界に人が生きること、この世界で主を知り・信じ、神の御心に従って生きることを望まれます。

そして私たち人間は、これらの罪・悪の世界を、私たちの手で支配し、変更するこ

とはできません。今の時代、環境・状況の中に、主なる神が私という人間に、いのちをお与えくださっていることを受け入れることが求められています。

そしてコヘレトは「わたしはこのようなことを見極め、太陽の下に起こるすべてのことを、熱心に考えた」(9)と語ります。神を知り、神による救いを信じ、そして御言葉により「王に従う」ことが求められます。しかし私たちは、今の世のすべてを無条件に受け入れることが求められているわけではありません。現状を見極め、考えなければなりません。

つまり私たちが王に対して従順に従うのは、主が語る御言葉に違反していない範囲で行うことです。王に従うことにより、主の律法に逆らうことになる時、王に従うことはゆるされません。また王に従うことにより、主によって生命が与えられた私たち自身が苦しめられ・虐げられることを主は求めておられません。

虐げ・苦しみの中で王に従うことは、コヘレトが語る空しい人生となります。

ウェストミンスター信仰告白第20章2「…良心のゆえにそのような教説を信じたり、そのような戒めに従うことは、良心の真の自由に背くことである。また、理解抜き信仰や絶対的で無批判的な従順を要求することは、良心の自由と、さらには理性をも破壊することである」。

主なる神を信じ、主がお立てくださった王に従って生きようとする時、現実の生活の中であって、空しさが絶えません(15)。

しかしコヘレトは「知恵を深めてこの地上に起こることを見極めようと心を尽くし、昼も夜も眠らずに努め、神のすべての業を観察します」(16)。私たちが神の知恵に生きようとする時、主の真理・福音の本質を知り、今の時代を見極めることが求められます。この時代にあって、主が私たちに何を語ろうとされているのか、簡単に答えを見つけることなどできません。

それでもなお、私たちは、この時代に生きる私たちに対して、主が語りかけようとしている御言葉に聴き続けなければなりません。そして、今の時代に生きるキリスト者として、世に問い続けること、語り続けることが求められているのだと思います。

「空の空、空の空、すべては空」と語り始めたコヘレトは、主なる神と出会い、神の知恵に生きています。しかし信仰を持ったからといって、すべてのことを理解でき、すべてのことが主の恵みであるとして、何事においても喜んで生きることができると言えば、決してそうではありません。

主なる神は、神を知り、神を信じる者、神の知恵に生きる者を覚え、主の恵みに満たしてくださることを、コヘレトは十分に認識しています(1)。

それでも神を信じ・神の知恵に生きたからといって、何事においても成功し、神を信じていない、罪を重ねる人たちとまったく違った生活ができるかといえば、見た目においては、生活に違いはありません(2)。

そしてコヘレトは、「人の心は悪に満ち、思いは狂っていて、その後は死ぬだけだということ」(3)と語ります。人の死は、人の悪・罪の結果であり、罪赦された罪人である私たちキリスト者も、避けることはできません。この結果、主なる神を信じて生きる必要があるのか？ 神を信じなくても同じでは無いかとの思いが出てきます。

続けてコヘレトは、「命あるもののうちに数えられてさえいれば まだ安心だ。犬でも、生きていれば、死んだ獅子よりましだ」(4)。「さあ、喜んであなたのパンを食べ 気持よくあなたの酒を飲むがよい」(7)と語ります。

ここは、神を知る者も、神を知らない者も、やがては死に、また忘れられるので、生きていることを喜ぼう、楽しく暮らそう、と解釈されるかと思います。

しかし、神を信じ、神による救いに与る者、そのために永遠の生命が約束されている者であることに安心しているのではないのでしょうか。そのように解釈することにより、7節においても、主によって与えられているすべてのことにおいて、主に感謝をもって、喜びをもって行い、楽しむことにより、主はそのことを受け入れてくださると語っているのではないのでしょうか。

そのため「空しい」と感じていた日々の生活であっても、主なる神の恵みに生かされ、主による救い・神の御国の約束に生きるとき、空しく思っていた生活も、主の恵み・喜びに生かされた生活へと変わること

を語っています(9)。

一方、神を知ることなく、神を信じることなく生きることににより、肉の死によって名が忘れられ、陰府における滅びに向かう(5b, 10)。

今までの章においても語られてきましたが、9章において「太陽の下に」という言葉が繰り返して語られています(3, 6, 11, 13)。

神を信じ、神の御言葉の知恵に生きていても、神を信じていない人々・罪に罪を重ねる人々と変わりがないように思われます。むしろ、神を信じて生きることににより、侮られ、迫害されることもあります。それでも主なる神を信じて生きる意味があるのか、との問いかけに聞こえてきます。

しかし、主の知恵に生きるコヘレトの信仰に揺らぎはありません(17, 18)。

「支配者が愚か者の中で叫ぶよりは

賢者の静かに説く言葉が聞かれるものだ。知恵は武器にまさる。

一度の過ちは多くの善をそこなう」。

支配者は大きな声を叫ぶことにより人々を黙らせ、力で支配しようとします。それは自らの権力が奪われるのが恐ろしいからです。人々が、クリスチャンを時に侮り、時に迫害するのも同様です。真の力を知っているからこそ、徹底的に迫害するのです。日本におけるキリシタン弾圧は、まさに時の統治者の恐れの裏返しだと思います。

主イエスも語ります。「体は殺しても、魂を殺すことのできない者どもを恐れるな。むしろ、魂も体も地獄で滅ぼすことのできる方を恐れなさい」(マタイ10:28)。

私たちが生きることは、小さなことであり、為政者・統治者を恐れさせる力があるとは思わないかもしれませんが、私たちが主なる神を信じ、主の持つておられる聖・義・真実に生き、主がお語りになる御言葉により知恵を得て私たちが生きるとき、自己中心に生きる為政者・統治者にとって、恐ろしい存在となります。

そしてこのことは同時に、私たちがキリスト者として生きることこそが、主を証しし、福音を宣べ伝えていることとなります。

だからこそ私たちは、主によって救われ、主の恵みに満たされていることに感謝しつつ、日々、主の御言葉の養いによる主の知恵を身に付けることが求められています。

コヘレトの言葉を読み進んできました。「空の空、いっさいは空」と語り始めたコヘレトですが、神と出会い、神の知恵に生きることが示されました。そして次第に「空しい」と語ることもなくなりました。

そして10章では「愚者」を繰り返し語ります。つまり「空しい」と語れば、自らがその立場に置かれていることに対する嘆きの言葉ですが、「愚者」は第三者的な立場に立っていることを物語っています。

つまりこの表現の変化は、御言葉に聴く私たちにも、変化を求めます。つまり、自らの生活に対して嘆いていた「空しさ」は主観的な言葉でしたが、「愚者」と第三者的な立場に立つことにより、客観的な言葉として語っているからです。

つまり10章においてコヘレトは、自らの人生に対する嘆きを止め、神を知らず、滅び行く人々の言動に注視しています。

最初の言葉が、それを決定づけています。「死んだ蠅(はえ)は香料作りの香油を腐らせ、臭くする」(1)。つまり愚者は滅び行く者ですが、すでに神の滅びに定められ、さらには周囲のものを腐らせ、臭くして、罪を周囲に伝搬させます。

「愚者は道行くときすら愚かでだれにでも自分は愚者だと言ふらす」(3)。「愚者はたわ言をもって口を開きうわ言をもって口を閉ざす。愚者は口数が多い」(13-14)。

コヘレトは、愚者は口数が多いと語りません。言い換えれば、人間の持っている罪は、言葉によって明らかになります。

そのため、パウロはローマ書3章で、次のように語ります。

「正しい者はいない。一人もいない。……神を探し求める者もいない。……彼らののは開いた墓のようであり、彼らは舌で人を欺き、その唇には蝮の毒がある。口は、呪いと苦味で満ち、足は血を流すのに速く、……彼らは平和の道を知らない。彼らの目には神への恐れがない」(3:10-18)。

人の口から出るもの、つまり心の中は、罪に満ちています。神の裁きに服さなければなりません。

このことを、ウェストミンスター大教理

問答は、問149で、「だれか、神の戒めを完全に守ることができますか」。

答 だれ一人、自分自身であれ、この世で受けるいかなる恵みの賜物によってであれ、神の戒めを完全に守ることはできず、かえって、思いと言葉と行いにおいて、日ごとにそれらを破っています。

と告白します。人は口から出る言葉において、主の律法に違反し、罪を犯しています。ですからここで注意しなければならないのは、コヘレトは愚者に対して語っている言葉ですが、主なる神を知らなかったすべての人、つまり今、主なる神と出会い、主を信じている私たちも、同じ罪を持っていることを忘れてはなりません。

その上で、コヘレトは賢者、つまり神を信じる者についても言及します。「知恵を備えておけば利益がある」(10)。「賢者の口の言葉は恵み」(12)。コヘレトは神を知る者は、神の知恵に聞く・神の御言葉に聴く者であることをすでに語ってきました。

神を信じる者は、自らの姿を顧み、本来は滅び行く者であることを理解した上で、主が罪の赦しと救いをお与えくださっていることが示されています。このときに初めて私たちは、主の御言葉に聴き、主の知恵に従う者とされます。すると、罪に満ちたことを口から発することなく、心の中に留め置き、主の御言葉によって与えられる知恵を語る者とされます。

コヘレトはこれまで空しさについて語ってきたように、私たちも日々、空しく思い、なぜということが繰り返し語られてきました。悪がはびこり、神に従う者が虐げを受けることもあります。しかしコヘレトは10章で愚者について語り、神を信じ、神の知恵に生きる賢者であることを私たちに求めます。そして、信仰が与えられ、神の知恵に生きることは、「いかに幸いなことか」(17)と語ります。

その上で、王の権力、人々を苦しめる金持ちに対して、「呪うな」(20)と語ります。つまり彼らは愚者であり、神の裁きにより滅び行く者です。永遠に続くことではありません。そして主なる神を信じ、神の救い・神の知恵に生きる私たちは、十字架の御業による罪の赦しと神の国における永遠の祝福が約束されています。

「空しい」と語り続けてきたコヘレトですが、10章では「愚者」を繰り返します。つまり、コヘレト自身は空しくありません。自分自身が当事者としてではなく、自分は神の恵みに満たされており、空しく生きているのは愚者であると語ります。

コヘレトは11章で改めて格言を語ります。「あなたのパンを水に浮かべて流すが良い。月日がたってから、それを見いだすだろう」(1)。ここをパンの一切れを川辺で流すように読むと、11章を理解することはできません。ここで語る「パン」は、食べ物全体のことであり、現在でいう流通・貿易のことです。つまり食料は船で貿易されており、何ヶ月も待たなければ、手に入れることができません。途中で盗難や事故があるかもしれません。それでも、月日がたってから、約束していた食料を手にするのを確信して契約します。つまり社会全体のことを学び・理解することにより、目に見えていない社会を受け入れ、それを信頼しています。現代は、さらに複雑な社会システムが構築されています。しかし私たちは、流通を信頼して、食料を手にしていきます。

2節では、「七人と、八人とすら、分かち合っておけ」と語ります。国が明日どうなるのか私たちには分かりません。そのため、7人・8人、なるべく多くの人たち・多くの国々に、国の事情なりを理解してもらっておくことにより、災いが起こったときにも安心です。現代日本で言えば、日本が安全に生きようとするならば、欧米各国だけと仲良くするのではなく、韓国や東南アジア、そしてインド・オーストラリア、さらには中国・ロシア・北朝鮮と敵対している国々であっても、話し合いができる関係、信頼関係を築いていくことにより、国の安全保障は安定します。敵国をつくるのは、武器産業を潤すことが目的であり、国を守ることにはなりません。

3,4節では、気候のことが語られます。先週も豪雨が襲い被害も出ましたが、突如、天候が変わると、大きな災害となります。農家ばかりか私たちも、日々の天気を気にします。そして被害がでるような天候になることを事前に予想し、災害を防ごうと対策します。現代では、気象衛星やスーパー

コンピュータを用いて、少しでも早く危険を予測し発表することが行われています。

このように、食料・平和・天候は、私たちの生活に密着しており、現代でも人々は、知恵を出し合い、システムを整え、安心した生活を送るために、努力を重ねています。

コヘレトは続けて語ります。「妊婦の胎内で霊や骨組がどの様になるのかも分からないのに、すべてのことを成し遂げられる神の業が分かるわけではない」(5)。つまり人間は、安全・安心した生活を送るために、日進月歩努力を惜しみませんが、新たな生命が生まれるメカニズムを完全に知ることはできません。現代では「生命の誕生のメカニズムも解明できた」と語る人もいますが、生命の誕生と死は、神の御支配の領域です。まさに現代は神の領域に入ろうとしているとも言えるかと思えます。

それでも人間には、なおも未知の領域が広がっており、社会の様々な分野において日夜研究が続けられています(6)。

そして、新しい発見・発明が行われることにより、生活は向上し、生活における楽しみが増しています(7)。

しかしコヘレトは、それでも「暗い日々」があり、「社会の闇」があることを指摘し、神不在の社会は「空しい」と語ります(8)。

その上で、若いうちに、こうした社会の中にあって、新たな開発・研究を行い、社会システムの構築のために参与していくことは、素晴らしいことであり、積極的に行うことを、コヘレトは奨励します(9前半)。

その一方で、神がいな中、神が不在の中でそれらが行われることにより、これらの社会システムは、人間の滅びに向かうことであり、生きて働く主なる神の存在を知り、畏れをもって、こうした働きに付かなければ、すべてが空しいことです(9後半-10)。

だからこそコヘレトは、若い時に主なる神を知り、主の御言葉により神の御心に適う社会システムを構築するように求めています(12:1-2)。

コヘレトの言葉は、個人の人生訓が語られているように思われますが、社会における神の支配・救済という大きな枠組みで理解するとき、私たちは神の御前で、畏れと救いの喜びをもって生きることができます。

コヘレトの言葉も最後の12章を迎えました。「空の空、空の空、いっさいは空である」と語り始めたコヘレトでしたが、主なる神と出会うことにより、主の恵みに生きる喜びが示されてきました。このことを覚えつつ、各章を読み進むと、「空しい」と語り続けつつも、神の恵みに生きる喜びが、生き生き語られていることに気が付きます。

12章では最初に「青春の日々にこそ、お前の創造主に心を留めよ」と語られています(1)。標語のように語られますが、著者とされるソロモンは、栄華を極めた生活をして、神抜き生活の空しさを突き詰めたからこそ、出てくる言葉です。それは人生において失敗を繰り返す、苦しみ、悲しみ、嘆き続けることにより、ようやく発する言葉であり、簡単に語る言葉ではできません。

そしてコヘレトは、神を知らずに経験する様々な体験が、どれだけ苦しく、結果として空しいものであるかを、2節以降確認していきます。

2節では、太陽が闇に、月や星の光が失せ、雨、つまり嵐・豪雨・台風といった自然災害に陥ることについて語ります。コヘレトは太陽を失った自然を、人生の光を失った人生の空しさを重ね合わせつつ、語っています。

つづく3・4節では、以前は活気ある家であったが、働く者もいなくなり、広々としつつも、さびれ・がらんとした屋敷の状態を語っています。もう、かつての優雅な活気ある生活が戻ってきません。

続けて5節では、「人は高いところを恐れ、道にはおののきがある」と語ります。足腰が弱り、もう丘を駆け上ることができません。道を歩くのにもおぼつかない状態です。

そして、「アーモンドの花は咲く」と語られます。アーモンドの花を知っている人には理解できることでしょうが、白い少しピンクがかかった花であり、桜に近いかも知れません。これは白髪となった老人のことを語っています。

つづけて「いなごは重荷を負う」と語ります。いなごは俊敏に跳ね回ります。しかしそのいなごが高齢になり、俊敏さが失われた状態を語ります。

そして最後に「アビヨナは実をつける」と語ります。「アビヨナ」は、「ケッパー」とも訳され、「風鳥木」(新改訳2017)と日本語が充てられています。「ケッパーの実はしばむ」(協会共同訳)、「アビヨナは実をつける」(新共同訳)、「風鳥木は花を開く」(新改訳2017)と訳し、訳の難しさを物語っています。ケッパーは、実・種が刺激的効果があると信じられており、性欲を促すものとされていました。それが花を咲かせ、実ももはや風味がないことを語っています。そして口語訳では、意識して「その欲望は衰え」と訳します。

そして6・7節において、すべてが終わりを迎え、死の状態を物語ろうとしています。神を見いだすことなく、人生を迎えること、このことこそが、「空しい、すべては空しい」とコヘレトは嘆きます。

だからこそ、主なる神と出会うこと、主からの知恵が与えられたコヘレトは、主なる神と出会うことによって与えられる知恵を教え、人々に知識を伝えてきました。

主の御言葉・聖書の言葉を語るとき、頭の中に知識を蓄える事ではありません。主の御言葉が、私たちのうちに、生きる言葉として蓄えられる必要があります。

「ただひとりの牧者」、つまり生きて今なお働いておられる主なる神を知ること、信じること、主の御言葉に生きることが何よりも大切です。

そうすれば、2～7節で語られてきたことを同じように経験するにしても、主の恵み、主の救い、神の御国の祝福を見据えて、それらの艱難に向かうことができ、ただ苦しい・空しい歩みではなく、信仰の訓練・鍛錬であることを受け入れることができます(参照：ヘブライ12:4～13)。

だからこそ、主の御言葉以外のものをいくら学んでも、空しさを取り除くことは何一つ見いだすことはできません(12)。

主なる神は、主なる神を知り、信じ、主のお語りになる御言葉に聴く者に、罪の赦しと天国の祝福を約束してくださいます。神を知らなければ、私たちは空しい人生を脱却することはできず、主の裁きを避けることはできません。しかし主の恵みに生きる時、私たちは、空しい人生から解放され、生きる希望を見いだすことができます。